



ミュージアム 通信

宇和島藩邸へ ようこそ — 調度品に映る親心 —

[かわら版]

プロジェクト報告展のご案内
講座のご案内
新商品のご案内

[連載]

第五回 未来の匠
— 次世代へ「技」を受け継ぐ人たち —
漆芸家



「女礼式略図 食事」(部分)・楊洲周延 画・財団法人味の素食の文化センター所蔵

宇和島藩邸へようこそ — 調度品に映る親心 —

**江戸の町並みを今に残す
大名屋敷跡**

伊勢半本店紅ミュージアムが所在する港区には、かつて多くの大名屋敷が存在していた。上・中・下屋敷または抱屋敷などを入れると、全国の約半数の大名が港区内に屋敷を構えている。広大な敷地を誇ったその多くは明治以降、庭園や公園、国立施設、大学、大使館などとして活用され、今でも大名屋敷当時の門や石垣、お庭などが部分的にだけ残っている所も見かけられる。特に大名屋敷が多かった六本木界隈は、当時の町割りのまま今日まで土地利用されてきたところも多く、現在の地図と古地図を照らし合わせながら散策するには実に楽しい場所である。その江戸時代の町割りが現存している屋敷の一つに、宇和島藩伊達家上屋敷跡がある。宇和島藩伊達家は、明暦元年（一六五五）、現在

の港区六本木七丁目にあたる麻布龍土町に屋敷地(中屋敷)を賜り、天和元年(二六八二)以降、江戸時代を通してここを上屋敷として使用していた。約三万二千坪(二〇万㎡)という広大な屋敷地は現在、

新国立美術館、政策研究大学院大学、都立青山公園、米軍ヘリポートなどに分割されているが、屋敷割りにはほぼそのまま活かされている。

宇和島藩伊達家は、仙台藩伊達家の親戚筋にあたる。仙台藩の支藩ではなく、慶長一九年(一六一四)仙台藩主伊達政宗の長子秀宗が宇和郡一〇万石を与えられ、国主格(国持)の大名として扱われた。伊達家は秀宗の後、九代、約二六〇年に亘って宇和島藩を治めている。

発掘された 宇和島藩伊達家

宇和島藩伊達家上屋敷跡は、二〇〇一年から二〇〇三年までの間に四期に

分けて、東京都埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われている。発掘調査は、新国立美術館と政策研究大学院大学の建設に伴う調査であったため、屋敷地の北東側半分のみの調査であった。

この遺跡の発掘調査で、大名屋敷の食器類を保管していたと思われる地下室が見つかかった。地下室から出土した食器類の破片は六三六点で、いずれも一九世紀初めのものである。接合の結果、いずれもほぼ完形に復元できた。このことから、欠けたり、引越しなどのために捨てられ、この地下室と共に



宇和島藩伊達家上屋敷の地下室から出土した食器類・東京都教育委員会所蔵

廃棄されたというわけではなく、本来ここに収納されていた食器類であったことがわかる。

この地下室には九段の階段が設けられていた。



宇和島藩伊達家上屋敷の地下室・東京都教育委員会所蔵

上から二段目の階段には直方体の切石が残っていたので、元は階段全体が石段であったと考えられている。地下室の階段が石段である例は必ずしも多くはない。つまり、この地下室は石段を用いるほど頻繁な出入りが行われていたことを示している。

きつと、日常的に使用する食器類を収納していたのであろう。

では、どのような食器が

収納されていたのだろうか。接合できた出土品は、肥前系の丸碗、広東碗、瀬戸・美濃系の端反碗、肥前系の小皿、大皿、鉢などがある。特に大皿は一〇個体以上にのぼる。今でこそ大皿は装飾品とされるが、大名屋敷ではあくまで実用品である。

考古学の遺物研究では、どのような状況で、どのようなモノと一緒に出土するかということが重要である。この地下室(食器庫)から出土した食器類は、使われていた場所と時間が明らかに同じである。よって、江戸期に上屋敷で使われていた食器類の様相や食生活を知ることができるのである。

贈答用磁器 「鍋島焼」の出土

宇和島藩伊達家上屋敷跡の発掘調査でもう一つ注目すべき点がある。「鍋島焼」の出土である。前述の地下室も含めて五遺構か

ら計六五点も出土した。この六五点という出土数は、実は一〇万石という小藩でありながら、極めて多量な出土なのである。ちなみに、加賀百万石と謳われた加賀藩前田家上屋敷跡では四点、御三家の一つである尾張藩徳川家上屋敷跡からは二点しか出土していない。



宇和島藩伊達家上屋敷跡から出土した鍋島焼・東京都教育委員会所蔵

「鍋島焼」といえば、今でも高級磁器の代名詞的存在として知られている。佐賀藩鍋島家は、関が原合戦で敗者である西軍側についていたため、その後、將軍家康との関係修復に苦慮していた。その鍋島家が將軍家への献上、公

家や大名家への贈答用に特別に焼かせたやきものが「鍋島焼」である。贈答用として藩が直接管理していた上に、市場に出回ることのない製品のため、絶対数が少ないのである。では、なぜ宇和島藩伊達家上屋敷跡からは六五点もの「鍋島焼」が出土したのだろうか。

今も昔も

変わらぬ親の想い

必ずしもこれだけが理由ではないが、宇和島藩伊達家九代の藩主のうち、五・七・八代の三人の藩主が鍋島家から正室を迎えている。婚姻関係だけではなく鍋島家と婚姻関係のない藩邸からも多量に出土する例があるため、説明しきれない点も多々あるが、一つの理由としては考えられよう。

献上品・贈答品としてしか流通しない品とはいえ、前述のとおり、あくまで大名屋敷では「鍋島焼」も実用品なのである。鍋

島家から三人の正室が入れの際、使い慣れた「鍋島焼」を日常使用する品の一つとして持ち込んだのだ。まさに、これらは、他の大名家に贈られた単なる贈答品としての「鍋島焼」とは違い、まるで、嫁ぐ娘の不安を和らげるかのように、幼い頃から慣れ親しんだものを持たせた親の愛が込められた「鍋島焼」に感じられる。

今秋、当館では宇和島藩伊達家伝来の十種香箱復元制作プロジェクト報告展を開催する。今回復元した十種香箱は、鍋島家から輿入れされた方の品ではないが、婚姻の折の調度と考えられる素晴らしい品である。

この秋、当館で十種香箱を鑑賞し親の愛を感じた後、六本木七丁目の上屋敷跡周辺へ赴き、宇和島藩伊達家へ輿入れされた姫君たちが想いを馳せたであろう同じ空を見上げてみてはどうだろうか。

プロジェクト報告展

「工藝の再結晶―江戸期工人の

軌跡を辿った香道具復元制作―」開催

2011年10月1日(土)～30日(日)

観覧料3000円

「十種香箱」とは、組香に使う道具一式を一箱に収めたものです。江戸時代、大名家の婚礼調度のひとつとして整えられた十種香箱。意を尽くし、技を凝らして作られた香道具は、工芸の各種技法を集めた「結晶」と呼ぶに相応しい品でした。

とを試みた「十種香箱復元制作プロジェクト」。本展では、その成果をお見せします。

今回、制作を担当したのは石川県を主とする漆工・金工・陶磁・装潢・彩絵に携わる工芸家諸氏。異なる分野の工人が一堂に会し、ひとつの作品を作り上げていった軌跡を、ぜひご覧ください。

※本展観覧料は、そのすべてを東日本大震災の義援金として寄付します。



復元対象の「黒塗御紋散梅に竹文蒔絵香道具箱」(部分)・公益財団法人 宇和島伊達文化保存会所蔵

Information

かわら版

報告展「工藝の再結晶」併催企画のご案内

■ワークショップ「香道具を愉しむ」

2011年10月15日(土) ①14:00～15:00 ②16:00～17:00

講師：山中瑞穂氏(香研究家、(公財)宇和島伊達文化保存会評議員)

■定員：各回8名(要予約) ■参加費：2,000円

■ギャラリー・トーク ※プロジェクト参加者による展示解説です。各日2回実施。

①2011年10月1日(土) 14:00～、16:00～ ②2011年10月22日(土) 14:00～、16:00～

■参加費：無料(ただし、観覧料をお支払いください。予約不要)

講座のご案内

■第12回「江戸の化粧再現講座」

2011年11月13日(日) 14:00～15:00

講師：弊館学芸員

■定員：15名(要予約)

■参加費：500円(紅染めの上生菓子付き)

下記電話にて先着順に予約を承ります。

TEL:03-5467-3735(紅ミュージアム)

※定員になり次第締め切らせていただきます。

次世代へ「技」を受け継ぐ人たち

漆芸家

孫苗さん

石川県輪島市といえば、自然豊かな漆の町。今回は、この町で漆芸制作に携わる孫苗さんをご紹介します。

古くは縄文時代までその歴史を遡ることができ、漆。接着剤にはじまり塗料や加飾としても発展し、人々の生活に華を添えてきた。

漆芸の一大産地・石川県輪島市で漆に魅せられたひとりの女性がいる。孫苗さんだ。彼女は中国の美術大学で漆を学んでいたが、もつと深く知りたいとの思いから大学卒業後、二〇〇〇年に来日。石川県立輪島漆芸技術研修所で研鑽を積み、現在は輪島にある北村工房でその才能を発揮している。彼女と漆との出会いは偶然だった。現在、中国各地の美術大学では漆を素

材として取り込んだ漆画やオブジェなどが主流である。その中で、当時の担当教官から日本の「蒔絵」という言葉を初めて学び、日本の漆芸に出会い、向学心を掻き立てられたのである。

日本での勉強や経験は、彼女の価値観を大きく変えた。それが漆とその道



具に対しての理解であり実践でもあったりした。筆の洗い方すらも知らなかったのである。例えば日本では、漆掻きの大変さには思いを馳せ、濾した漆は最後の一滴まで大切に使う。筆は自分の指に乗せ

優しく丁寧に洗う。材料や道具への思いの違いに、今までの自分を恥ざしく感じたという。そして何よりも大きな変化は古典的な漆芸作品の見方だ。

これまでは「古典漆芸作品」を鑑賞する機会もなく、作品本来の魅力さえも理解できずにいた。しかし、それらの作品を数多く、しかも間近で見ること、その魅力に引き込まれていった。古典には学ぶべき多くの技術やエッセンスがある。古典からの学びで視野を広げ、新しい作品に反映してゆくことで、更なる可能性へ繋がる事に気付いたのだ。

孫さんは、いつか漆芸の魅力を母国・中国に伝えてゆきたいと考えているが、今は日本で学び続けたいという気持ちを強く持っている。漆芸の中



心地・輪島には、必要なものすべてが揃っている。尊敬する指導者、材料、環境、そして刺激し合うことができる仲間達。「やりたいことができるこの環境にいたいことができて、本当に幸せです」。

来日当初は苦労した日本語を、今は自由に操る孫さん。古典と向き合った十種香箱復元制作プロジェクトにも、蒔絵担当として参加している。純粋な心で漆芸と向き合う彼女の手仕事を、ぜひ多くの方にご覧いただきたい。

新商品のご案内

伊勢半本店では、七五三に合わせた10月1日(土)~11月30日(水)の間、大好評の秋季限定柄「小町紅『手毬』花てまり・菊千代紙」を発売いたします。女の子様が初めて点す口紅には、本紅をおすすめいたします。



Since 1825 伊勢半本店 ミュージアム

●開館時間 / 11:00~19:00 ●休館日 / 毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)
東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車
B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>